



## 日常業務にひそむリスクとその対策

### テルモメディカルプラネックス® の活用方法

近年の看護業務の高度化・複雑化に伴い、医療施設では看護師を対象としたさまざまな研修やトレーニングが実施されている。医療機器メーカーであるテルモでは、医療機器の適正使用などに関するトレーニングを提供している。その実際を紹介する。

# 医療施設とともにプログラムを企画・運営し “自ら考え行動できる力を養う”トレーニング を提供

#### 臨床での実践力向上をめざす シミュレーショントレーニング

2002年、厚生労働省が「看護師等による静脈注射は診療の補助行為の範疇である」と行政解釈を変更。そして、2007年の厚生労働省医政局長通知によって、「医師と看護師等の医療関係職との役割分担」のなかに静脈注射等が明記され、「看護師の業務拡大」がにわかにクローズアップされた。

静脈注射などで使用する医療機器を製造・販売するテルモでは、看護師による静脈注射の安全を確保するため、2004年に「ナーストレーニングチーム」を立ち上げた。

テルモのクリニカルサポート部部長の星野早苗さんは、「私も看護師として臨床を経験していたので、とにかく臨床現場に則したトレーニングを開発しようと考えました。当時、神奈川県看護協会の医療安全対策課長であった安井はるみさんにご協力いただき、静脈注射の手順やチェックリストなどのツールをつくりはじめました」と言う。

トレーニング・プログラムの開発にあたっては、医療安全を担保するために、静脈注射の手順などに加え、コミュニケーションやリーダーシップといったノンテクニカルスキル、安全のための優先順位などを取り入れたという。

「臨床現場で“自分で考え行動できる力を養う”ことも重要視したので、さまざまなシミュレーション教育に力を入れています。シミュレーションは臨床での動きを実際に体験できます。講義などで頭で理解しても臨床に戻るとできない、といったことも少なくありませんから、頭だけでなく体で覚えることも大切なので

す」

実際のシミュレーショントレーニングでは、①基本の確認、②臨床現場に近い状況下でシミュレーション、③体験を振り返り課題を分析し対応を考える、を繰り返し行うことで、考えながら行動できる力を養うことができるという。

#### プログラムの最終ステップは 指導者を養成するコース

テルモがサポートするトレーニングは、「医療施設とともに創りあげる」をコンセプトにしている。

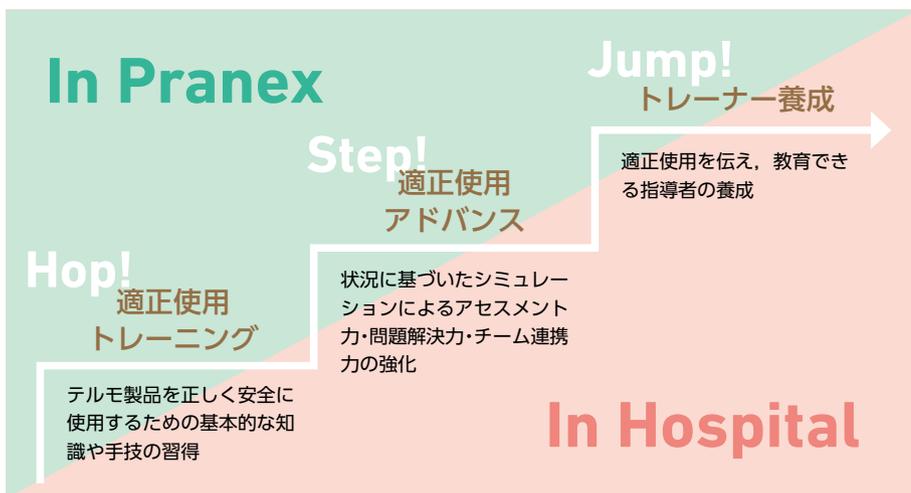
#### ●テルモが提供するトレーニングのコンセプト

医療機器を適正にご使用いただくためのトレーニングを通じ、医療事故・院内感染の低減をめざします



#### 医療施設とともに創りあげるトレーニング

## ●テルモが提供するトレーニングの種類



テルモ クリニカルサポート部部長の星野早苗さん。「日本看護協会やさまざまな医療機器メーカーが同様のトレーニングを提供していますから、医療施設それぞれの課題に合ったプログラムを選択することをおすすめします」と言う

「私たちテルモの医療機器を適正に使用いただくためのトレーニングを通じて医療事故や院内感染の低減をめざしていますが、院内のルールやガイドラインに則った教育プログラムでなくては意味がありません。したがって、それぞれの医療施設の教育担当者とディスカッションしながらプログラムを調整し、現場の課題やニーズに合わせてカスタムメイドしています」と星野さん。

プログラムは基本的に、①適正使用トレーニング(テルモ製品を正しく安全に使用するための基本的な知識や手技の習得)、②適正使用アドバンス(状況に基づいたシミュレーションによるアセスメント力・問題解決力・チーム連携力の強化)、③トレーナー養成(適正使用を伝え、教育できる指導者の養成)、の3段階としている(いずれも有償)。

「トレーナーの養成を最終段階に設定したのは、院内教育の継続性を保つためです。とくに、新人看護師を毎年多く採用する大学病院などでは、院内の指導者を養成していかなければ教育を継続していくことができないと思います」

指導者の養成プログラムとしてテルモが現在サポートしているのは、「インジェクショントレーナー養成プログラム」と「輸液・シリンジポンプトレーナー養成プ

### ●インジェクショントレーナー養成プログラム

高い静脈注射実施能力のある看護師を育成できる指導者に、必要な知識・技術・態度を習得する

#### 目標

- ①インジェクショントレーナーの役割と責任を患者安全および専門職としての視点からとらえることができる
- ②静脈注射について科学的・安全学的根拠に基づき指導することができる
- ③学習者の主体的かつ効果的な学びを促す教育技法について理解することができる
- ④患者安全に寄与する注射指導計画を立案することができる

### ●輸液・シリンジポンプトレーナー養成プログラム

医療安全の要素を取り入れた看護師・臨床工学技士が参加できる指導者向けの研修プログラム。シナリオシミュレーション(新人役・指導者役・観察者役に分かれてのロールプレイ)による学習と振り返り(ビデオ活用)を行い、指導におけるポイントや視点を学ぶ

#### 目標

- ①医療安全の基礎的な考え方を理解できる
- ②シミュレーションを用いた学習支援の基礎を理解できる
- ③輸液・シリンジポンプの安全な使用法を実践・指導できる
- ④指導者として院内研修の企画・実践の考え方を理解できる

ログラム]である。

「インジェクショントレーナー養成プログラム」は、高い静脈注射実施能力のある看護師を育成できる指導者に、必要な知識・技術・態度を習得するというもの。一方、「輸液・シリンジポンプトレーナー養成プログラム」は、医療安全の要素を取り入れた看護師・臨床工学技士が参加できる指導者向けの研修プログラムで、シナリオシミュレーション(新人役・指導者役・観察者役に分かれてのロールプレイ)による学

習と振り返り(ビデオ活用)を行い、指導におけるポイントや視点を学ぶというものである。

これらのプログラムは神奈川県中井町のテルモメディカルプラネックスで行われている。また、テルモの汎用医療機器(シリンジや輸液セットなど)による事故を防ぐために、添付文書に記載された注意事項のうち、発生する頻度や危険度が高いものを体験して理解する教育プログラム「T-PAS研修」\*も実施されている。

\* T-PAS研修の詳細については、テルモ株式会社にお問い合わせください。

# 看護師の「フィジカルアセスメント研修Ⅲ」を テルモメディカルプラネックスで実施

慶應義塾大学病院では、2009～2013年の文部科学省大学改革推進事業において集合教育の見直しを行った際、「看護師のフィジカルアセスメントの強化」が課題となった。

そこで、フィジカルアセスメント研修プログラムを改訂し、

- I. フィジカルイグザミネーションスキルの学習
- II. フィジカルイグザミネーションを活用したシミュレーション
- III. 臨床判断～看護計画立案までのシミュレーション

の3段階に構成を変更した。

慶應義塾大学病院看護部次長の加藤恵里子さんは、「2012年までは3段階の研修を当院の実習室で行っていましたが、当時の前院長の勤めもあり、2013年からシミュレーション中心の研修Ⅲはテルモメディカルプラネックスを使用しています。実習環境の準備やビデオの操作などをテルモの方に担当していただけなので、準備の時間も短縮され費用対効果も高いと実感しています」と話す。

現在は、入職1年目の9月に研修Ⅰ、11月に研修Ⅱを同院の実習室で行い、翌年4月にテルモメディカルプラネックスで研修Ⅲを実施しているという。

「シミュレーショントレーニングでは、各グループを担当するインストラクターが自身の役割をどれだけ理解できているかが大きなポイントとなります。1年目は確実に理解していたのは教育担当看護師数人でしたが、その後、毎年5～6名の臨床指導ナースを育成できたことで、よりスムーズに研修を運営できるようになりました」

慶應義塾大学病院では、「指導者の育成」も同時に実施してきたという。現在25名の臨床指導ナースがその役割を担っている。

「新人看護師が何を根拠に看護判断しているかを言語化できることが大きな目的になりますから、インストラクターが新人看護師の思考をいかに引き出すかがポイントとなります。4年間継続できたことで、場づくりや問



慶應義塾大学病院看護部次長の加藤恵里子さん。「テルモメディカルプラネックスでの研修は今年で4年目になるので、シミュレーションなどの打ち合わせも一度ですませることができるようになりました」と話す



テルモのスタッフと打ち合わせを行う慶應義塾大学病院の加藤さんとインストラクター

慶應義塾大学病院「フィジカルアセスメント研修Ⅲ」のオプションとして静脈注射演習も一緒に組み立てられている。研修目的は、「看護師が患者に安全に静脈注射の技術が提供できるようスキルの確認ができる」である



いかけの方法もよくなってきたと実感しています。インストラクター用の資料などについても工夫し、毎年振り返りながら、ブラッシュアップできました。テルモの方にも情報や意見をいただき、完成形になってきたと思います」

臨床指導ナースがインストラクターを担当することで、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと続く研修の過程で、新人看護師の変化にも気づくことができるという。

加藤さんは今後の課題について、「研修自体は4年間でブラッシュアップしましたが、“5年前の新人看護師に比べて今年の新人看護師がアセスメント力が高いか”といえば、現場の声はそうでもありません。平均在院日数も

さらに短くなり、患者さんも高齢化し、医療もより高度・複雑化しています。そういった環境の変化を考慮すると、シミュレーションのシナリオについて検討していく必要があると思っています。もう少し事例の重症度を上げ、より緊急性の高い状況にアレンジしたほうがよいのではないかと感じています」と話した。

なお、慶應義塾大学病院とテルモが共同で企画・運営している「フィジカルアセスメント研修」の内容は、近くテキストやDVD(いずれも有償)として作成され、テルモメディカルプラネックスを使用する他施設の看護部が参考にできるという。